

平城京左京二条二坊十四坪の調査

―第524次

1 はじめに

宅地造成にともなう事前調査である。平城京左京二条二坊十四坪は、法華寺阿弥陀浄土院が所在する十坪の南東に位置し、調査地点は坪の北西隅からやや東になる。なお、調査地点の北側には二条条間路、二条条間路を隔てて北西には、法華寺の寺域南辺中央部に設けられた門SB7110（『年報 1998』）、西側 5 m に東二坊坊間東小路が所在する。

2 基本層序

調査区は、東西 3 m、南北 16 m のトレンチを設定した。基本層序は、現地表面下 0.4 m で水田耕土・床土層（厚さ 0.7 m）、その下に菰川の氾濫によるとみられる粗砂層（厚さ 5 cm）が堆積し、現地表面下 1.2 m（H=60.50 m 付近）で奈良時代の遺構面を検出した。遺構面は整地土上に展開するが、調査区南側では整地土を 2 層にわたり確認した。上から土器片などを含む整地土 1（厚さ 20~30 cm）、整地土 2（厚さ 20 cm）であり、それぞれの整地土から掘り込まれる遺構を検出した。これらは、いずれも奈良時代に属することから、奈良時代の遺構面が上下 2 面にわたって存在し、出土遺物から奈良時代前半（整地土 2）と後半（整地土 1）と少なくとも 2 時期に分かれる。

3 検出遺構

遺構は、X-145,410 から X-145,414 付近にかけて SD10575 と SD10576、X-145,417 付近に SD10577、塀ないしは建物と推定される南北方向の掘立柱列 2 条、整地土 2（下層の整地土）から掘り込まれた東西溝 SD10580 などを検出した。SD10575・10577、および掘立柱列は、いずれも整地土 1（上層の整地土）から掘り込まれる。なお、SD10575・10576 の新旧 2 条の東西溝は、位置や周辺の調査成果などから、いずれも二条条間路南側溝と考えられる。

二条条間路南側溝SD10575 奈良時代の二条条間路南側溝と考えられる素掘りの東西溝。掘り直しの痕跡が確認できることから、新旧 2 時期分の溝があり、古い

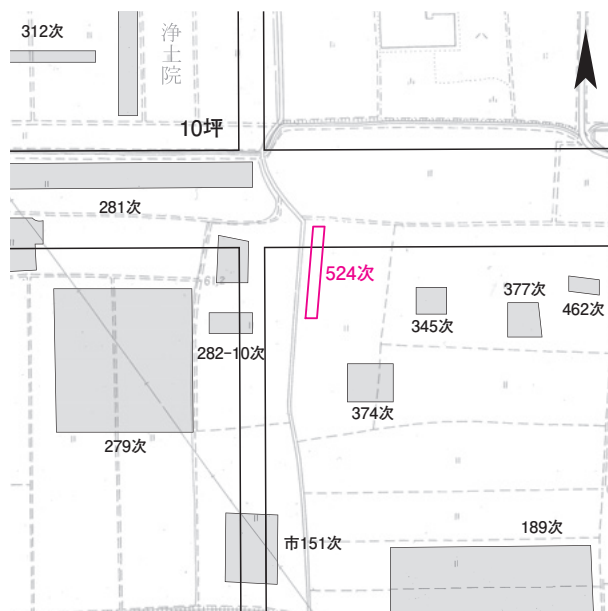


図245 第524次調査区位置図 1 : 2000

SD10575とその南側を掘り込むSD10576とに分かれる。このうちSD10575は、幅 4 m、深さ 0.65 m を測り、後述するSD10576より幅広く、断面形態が逆台形状を呈する。埋土は砂や粘土を主体として厚く堆積しており、豊富な流水があったと判断されるが、最下層は木屑などの有機物が主体となっており、SD10580より少量だが、木簡、木製品、種実などが出土した。

二条条間路南側溝SD10576 奈良時代後半の二条条間路南側溝と考えられる幅 2.5 m、深さ 0.65 m を測る素掘りの東西溝。不整な V 字状の断面形態を呈し、埋土は砂が主体で、一定量の流水があったと判断される。埋土から土器や瓦片などが出土した。

東西溝SD10577 素掘溝で、幅約 1.5 m、深さ 20~25 cm と浅い。埋土は砂質土が主体で、瓦が多く出土したが、そのなかには熨斗瓦と推定できるものも含まれる。加えて、SD10575でも瓦が多く出土した点などを勘案すると、SD10575とSD10577との間には築地塀が存在し、SD10577が築地塀の内溝であった可能性が考えられる。いずれの溝も整地土 1 を掘り込むことから、築地塀が展開したのは奈良時代後半であろう。

掘立柱塀SA10578 SA10578は、一辺 1~1.2 m、深さ 0.4 m と大型の方形柱掘方を有する南北塀。SD10577の際まで展開することから区画塀と推定した。

掘立柱塀SA10579 SA10578と同様、掘立柱塀と推定したSA10579は、SA10578のすぐ西脇に位置する径 0.4

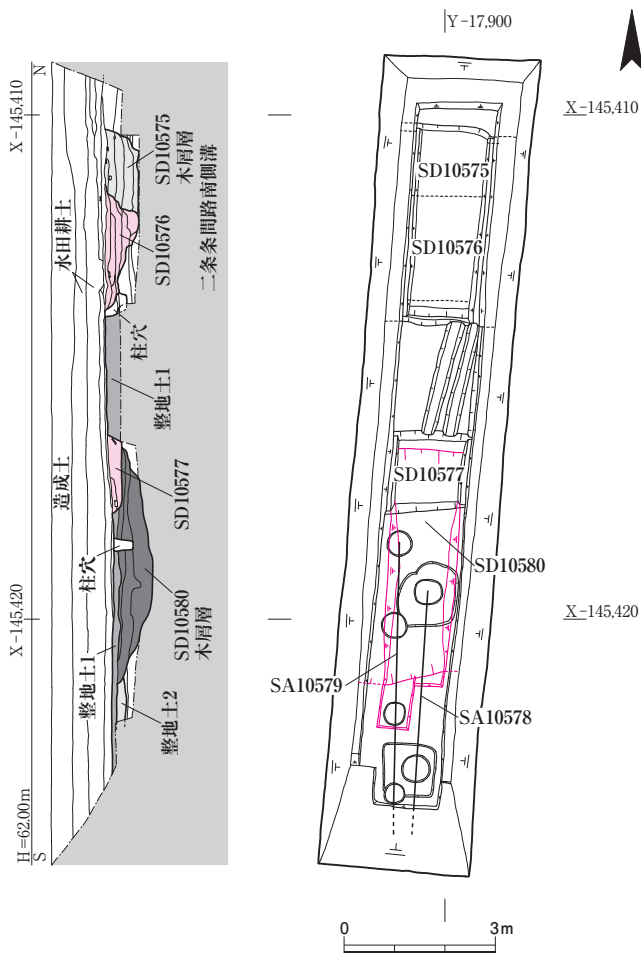


図246 第524次調査区遺構図・土層図 1:150

m、深さ0.4mの平面円形を呈する南北方向の堀であり、調査区内で3間分検出した。これら2列の堀は、重複関係からSA10578→SA10579の順で構築され、今回の調査で坪内の区画堀の新旧を把握したと考えておきたい。

東西溝SD10580 これまでに取り上げた遺構より下層に展開する素掘溝であり、南北最大幅4.6m、深さ0.65m。断面形態は、ゆるやかなU字状を呈する。SD10575と後述する木製品や木簡が出土した木屑層の状況が似通うことや、湧水が多いことなどを勘案して、ここでは溝と推定したが、全体を把握できておらず、土坑である可能性も存在する。埋土は、砂質土や粘土を主体とするが、最下層は厚さ40cm前後の木屑層からなり、この木屑層から木簡、木製品、土師器や須恵器などの土器が多数出土した。出土土器はいずれも奈良時代前半におさまることから、SD10580は奈良時代前半の所産と考えられる。またSD10580は、埋没後に整地土1が覆うことから、整地土1が奈良時代後半の整地と考えるのが妥当だろう。



図247 第524次調査区全景（北から）

4 出土遺物

土 器

本調査では、整理用コンテナ6箱分の土器が出土した。いずれも奈良時代の土師器および須恵器からなり、SD10580の木屑層から後述する木簡群と共伴する一群と、二条条間路南側溝から出土した一群とがある（図248）。

まず、奈良時代前半と考えられる下層の東西溝SD10580から出土した土器は、土師器および須恵器食器類（1～3）と貯蔵具（4）、転用硯（10～12）などからなる。1・2は土師器杯C。1は復元口径19.2cm、復元高2.6cm。口縁部を横ナデし、外面はヘラケズリ後横方向のヘラミガキ調整を施す。2は口径17.4cm、器高2.8cm。口縁部から外面中位まで横ナデ調整する。内側面に斜放射暗文、底面に螺旋暗文を施す。3は須恵器皿B身。復元口径22.2cm、器高3.8cm。4は須恵器平瓶。頸部以上を欠損し、胴部内面に漆が付着することから、漆容器として使用されたとみてよい。10～12は須恵器甕転用硯。いずれも内面側に墨をすった痕跡が明瞭で、12は墨痕も明瞭。SD10580出土土器は、暗文を有する土師器など、その特

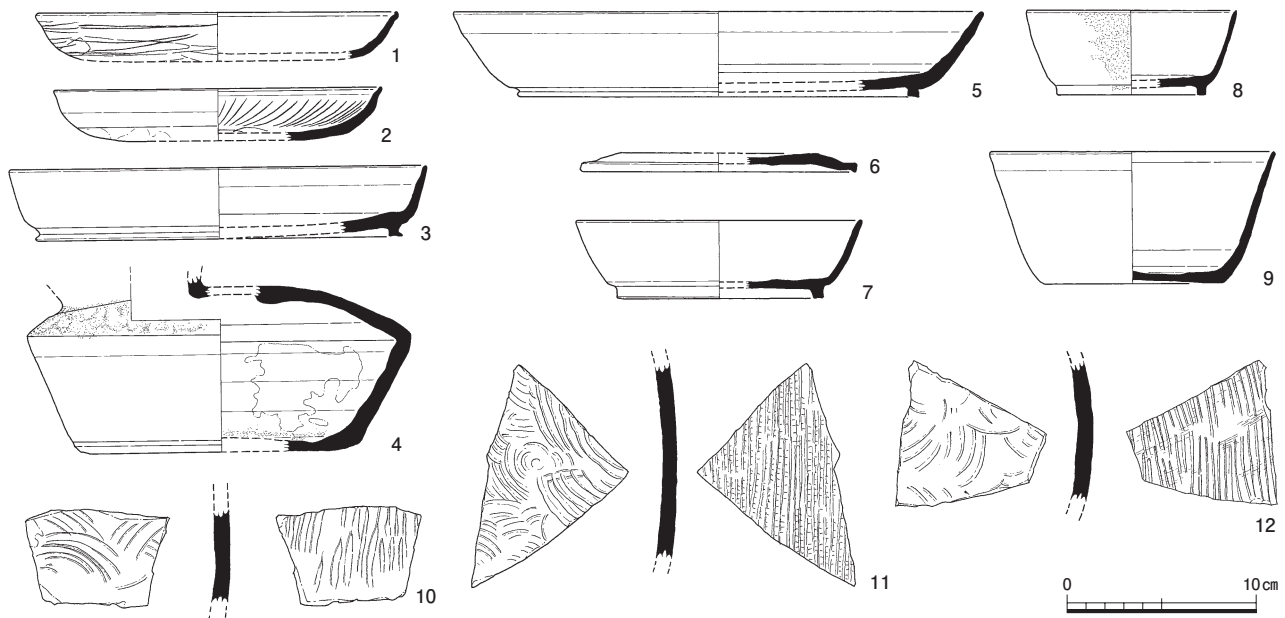


図248 第524次調査出土土器 1 : 4

徴からみて平城宮土器Ⅲまでにおさまると考えられ、出土木簡の年代とも調和的である。

奈良時代後半の二条条間路南側溝SD10576からは、食器類ばかりが出土し、図化ができた個体はいずれも須恵器である（5・7・8）。5は皿B。口径28.0cm、器高4.5cm。7・8はともに小ぶりの杯B身。復元口径は7が15.1cm、8が11.0cm。7にみられるやや丸みをもつ体部や、8のように比較的鋭角に立ち上がる体部といった特徴は、平城宮土器Ⅳ以降に多く、SD10576が奈良時代後半の所産であることを示唆する。

一方、SD10576以前の二条条間路南側溝であるSD10575出土土器は少量にとどまり、図化できる個体は1点のみである。6は須恵器杯B蓋で、復元直径14.6cm。均一でない厚みだが、端部を下方へおさめる形状は、平城宮土器Ⅲ頃の特徴である。

（青木 敬）

瓦 磚 類

本調査で出土した瓦の一覧は、表33の通りであり、ここでは主要な軒瓦を報告する（図249）。SD10575からは1の6311Baが出土。これまでも左京二条二坊から比較的まとまった点数が出土しておりⅡ-1期に位置付けられる。また、緑釉の平瓦片が1点出土した。SD10576からは6276Gと3の6751Aが出土。6276Gは高台・峰寺瓦窯産とされる藤原宮式だが、平城京内では法華寺旧境内において数点出土している。6751Aは平安時代と

表33 第524次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6276	G	2	6641	F	1
6311	Ba	1	6702	?	1
			6721	C	1
				G	1
			6751	A	1
			型式不明（奈良）		4
軒丸瓦計		3	軒平瓦計		9
丸瓦		平瓦	磚		
重量	36.933kg	124.278kg	6.311kg		
点数	363	1445	8		

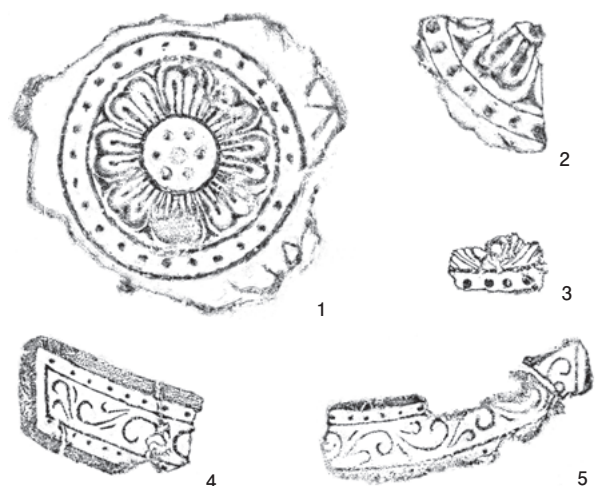


図249 第524次調査出土軒瓦 1 : 4

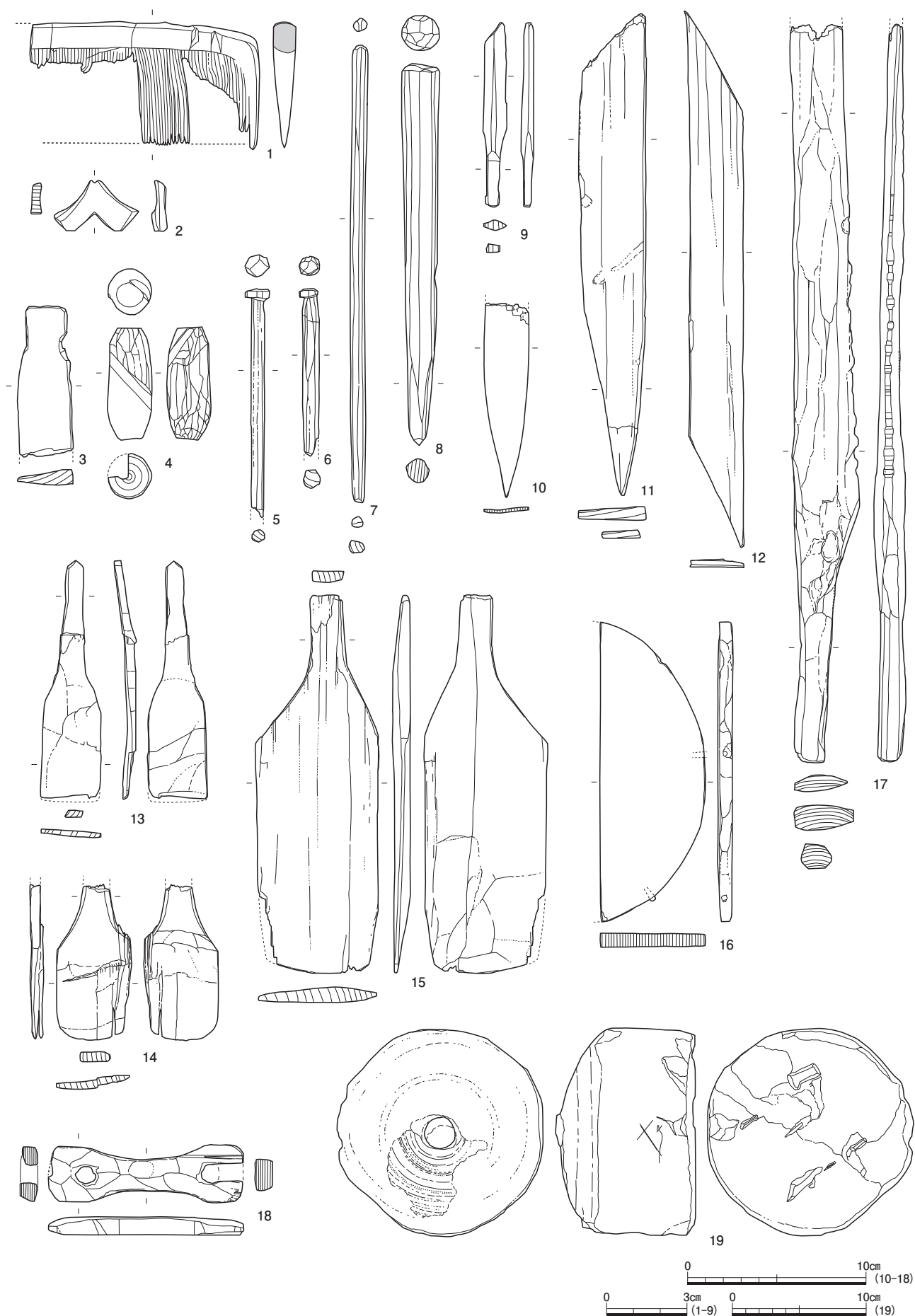


図250 第524次調査出土木製品（1～9は1：2、10～18は1：3、19は1：4）

されるが、法華寺阿弥陀浄土院を中心に出土している。SD10575の木屑層からは4の6721Cが出土しており、Ⅱ-2期からⅢ期に位置付けられる。そのほか包含層から2の6276Gと、5の6721G、6641Fが出土。6641Fは西田中・内山瓦窯産の藤原宮式。6721GはⅡ-2期。（川畑 純）

木製品

SD10580から707点、SD10575木屑層から14点の木製品が出土した。前者の内訳は服飾具（横櫛1点、留針2点）、遊戯具（琴柱1点）、祭祀具（斎串4点、鎌形1点）、食事具（匙形木器・杓子状木器7点、箸20点）、容器（曲物底板1点、曲物側板4点）、その他（付札3点、紐留具1点、ささら棒1点、部材15点、楔2点、轆轤挽き残欠1点、籌木7点、加工棒586点、加工板50点）である。後者は、加工棒14点のみである。ここでは、大半を占めるSD10580の主な木製品について記す（図250）。なお分類については『木器集成図録』に準ずる。

1は横櫛。平面が長方形で両端がやや丸みをもつAⅡ型である。残存長8.6cm、高さ4.8cm、厚さ0.9cm。2は琴柱。柁目材を三角形に整形し、上端に弦受けの切れ込みを入れ、底面を山形に切り欠き二股に足を作る。幅3.2cm、高さ1.9cm、厚さ0.5cm。3は付札。断面台形の薄い板目材を素材として、上部両端に切れ込みを入れる。下半を欠損する。残存長5.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。4は紐留具か。小ぶりの枝状の素材をラグビーボール状に整形し、長軸に対して斜めに径0.3cm程度の孔をあける。5・6は留針。両者とも頭部を鉤頭状に作り出すA型式。いずれも先端部は欠損する。5は身部径が頭部よりも小さく下方まで直線的に伸びるが、6は頭部と身部の最大径がほぼ同じで頭部下で窄まる。5は残存長8.5cm、頭部径0.9cm、身部径0.5cm、6は残存長6.3cm、身部径・頭部径ともに0.7cm。7は箸。完形品で、長さ17.2cm、径0.7cm。下端に向かってわずかに細くなる。8は加工棒。一端に最大径をもち、他端に向かって細くなる。表面の加工痕が明瞭に残り、断面は多角形となる。長さ14.2cm、最大径1.4cm。9は鎌形。三角形柳葉鎌を模したもので、切先を斜めに裁断する。10～12は斎串。10は薄い柁目材を利用し、下端が尖る。上半部は欠損する。残存長9.8cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。11・12はやや厚みのある板目材を素材として、一端あるいは両端を尖らせる。11は長さ27.0cm、幅3.8cm、厚さ0.7cm。12は両端を斜めに裁断

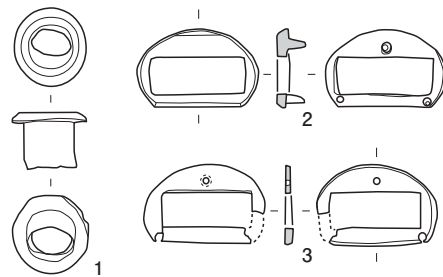


図251 第524次調査出土金属製品 2：3

するAⅠ型式。長さ30.0cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。13は、匙形木器。身部先端を直線的につくり、柄部先端が山形をなす。下端をわずかに欠損する。残存長13.4cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm。14、15は杓子状木器。両者とも身部先端を直線的につくり、身部裏面に先端を薄くする加工を施す。柄部を欠損する。14は残存長8.7cm、幅4.3cm、厚さ0.6cm。15は残存長21.1cm、幅6.9cm、厚さ1.0cm。16は曲物の底板。柁目板を利用する。側面には木釘および木釘穴を残す。半分以上欠損する。復元径18.8cm、厚さ0.8cm。17はささら棒。板目材を剣状に整形し、片側辺に鋸歯状の加工を施す。上端は欠損する。残存長41.4cm、最大幅3.6cm、厚さ1.8cm。18は部材の把手。長方形の板目材を素材として、長軸両端が幅広で、中央がもっとも幅狭になる。両端に径1.0cmの円孔を穿つ。長軸12.1cm、両端の短軸3.2cm、中央の短軸1.8cm、厚さ1.0cm。19は、挽物製作時に轆轤側に残った材。轆轤に固定した面には、5つの爪跡が中央に1つとその上下2つずつ配置される。反対の面は、挽き出しの際の同心円状の痕跡が残る、中央には径2.5cmの突起が認められる。また側面に「×」の刻印が施される。径15.4cm、厚さ10.5cm。

金属製品

SD10580から金銅製環状金具1点と銅製丸柄1点が出土した（図251）。1は金銅製環状金具。径1.3cm、高さ1.0cm。大刀などの把頭にみられる眼に用いる金具か。2、3は丸柄である。2は表金具で、裏面に3つの鉤足を鋳出す。表面に黒漆の痕跡がわずかに残る。長軸2.1cm、短軸1.4cm。透孔は縦0.6cm、横1.6cm。3は裏金具で、長軸2.1cm、短軸1.4cm。透孔は縦0.6cm、横1.6cm。両者は同一個体と考えられる。

自然遺物

植物種実 SD10580・10575下層からは多くの植物種実が出土した。現在整理中であるため、概要のみを示すこ

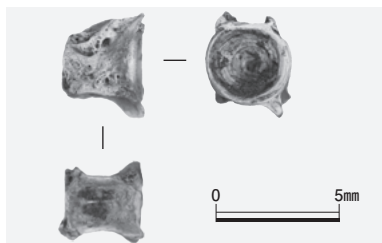


図252 第524次調査出土動物遺体（トビウオ科?）

ととする。木本類では、モモ核、オニグルミ核、サンショウ種子、ナツメ核、キイチゴ属核、ブドウ属種子、アケビ属種子、マタビ属種子、クリ皮など、草本類として、メロン仲間種子、ナス属種子、エゴマ果実、シソ属果実、タデ科果実、イネ穎、アワ有ふ果などがあり、多種におよぶ。食用植物でもっとも多いのはメロン仲間で、ナス属やサンショウが目立つ。雑草と考えられるタデ科果実も多い。

（芝康次郎）

動物遺体 SD10580木屑層から、トビウオ科の可能性のある腹椎が1点出土した（図252）。骨は焼けており白色化していた。また、種は不明であるが、哺乳類の歯の破片も出土した。

（山崎 健）

木 簡

奈良時代後半の二条条間路南側溝SD10575から14点（うち削屑13点）、十四坪北西隅の下層の東西溝SD10580から4,355点（うち削屑4,253点）、計4,369点（うち削屑4,266点）が出土した。現状で1文字以上釈読可能なものは、削屑を除くと2割弱、削屑では5%弱、全体では約5%となる。ここでは主要なものを報告する（図253・254）。

SD10580出土木簡でもっとも目立つのは、3のような人名を記す木簡である。煩雑になるため今回は割愛するが、削屑の大半も人名に由来するものが占めている。14～17にみえる十二支は出勤日を示すとみられ、1・13・23などに舍人がみえることともあわせて考えると、舍人の勤務管理に関わる可能性がある。1によればこれらの舍人の勤務場所には「高殿」（楼閣建物）があった。

4・5は接点が明瞭でないため別番号としたが、木目は酷似する。4の「皇」に続く文字は他の可能性も皆無ではないが、5の「太子」の上の文字の候補は「皇」以外に考えにくく、4・5の順で上下に連続する可能性がある。そうでない場合も同一木簡の削屑であるのはまず間違いない。したがって、皇太子付きの者の勤務人数を書き上げる記載に由来する削屑とみられよう。

6～9は紀年銘資料。6の養老7年は723年、8の神亀元年は724年である。8の存在や9との類似、内容・遺構からうかがえる資料群としての一括性の高さからみて、7・9も神亀元年の可能性が高い。19の郷里制の記載とも矛盾しない。

7・9・10にみえる主典は第四等官の一般的な表記で、特定の用字をもたないこの表記は令外官に用いられる。9にみえる正八位下は概ね官・職・衛府クラスの大主典に相当するが、官司の具体名は同定できない。

11は衛門府に宛てた移の削屑とみられる。12の「府」も某衛府の可能性が高い。2に「下番」（非番ではなく月の後半の勤務の意であろう）とあり、番上勤務の管理がうかがえるので、SD10580出土木簡に多数みえる人名に、舍人だけでなく兵衛が含まれる可能性も考える必要があらう。

18～20は貢進物付札。18は河内国大県郡の米俵の荷札とみられる。郡単位の俵の貢進は他に類例がない。19は類例の少ない庸塩の荷札。庸塩の貢進量は1人あたり1斗5升で（『平城宮木簡 3』2892解説参照）、2人分を合成するのが一般的だったらしい。ここではコザトを越えて合成されている。なお、備前国賀茂郡児嶋郷からの貢進には、平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑SK820出土の調塩の荷札2点の事例がある（平城宮木簡322・323号）。20の中男役物は、養老元年（717）に調副物と中男の調を統合して新たに設けられたいわゆる中男作物のことであろう。税目の名称として確立するのは8世紀後半以降で、文字通り「中男を役して進」める貢進であったことを示す表記といえる（『続日本紀』養老元年11月戊午条）。21は鯛腊の荷札。能登国と若狭国に類例があるが、調と明記のあるのはこれが初めてである。

22は銭の付札。「下」は某所から下給するの意であらう。23は横材木簡の削屑で、位階ごとに帳簿による勤務管理をおこなっていた様子を示す。24は習書木簡。「春」を分解して示す。「夷」の異体字といわれる「夫」が、「秦」のほか「春」の一部でもあることを再認識させる興味深い事例。SD10575出土の25も銭の付札とみられるが、「山田余」は不詳である。

以上概観したように、SD10580出土木簡は、内容的にも一括性の高い一群である。1などにみえる舍人は、4・5の皇太子の存在や養老・神亀の交わりという年紀から



図255 SD10580全景（中央下の黒色の範囲が木屑層、北西から）

考えると、即位前の聖武天皇、すなわち首皇子の春宮舎人とみてよい。衛府の活動もその警備担当として理解が可能である。このように全体として皇太子首皇子に関わる官司の活動に収斂することが見通せよう。7・9・10にみえる主典が置かれた官司がその官司そのものなのか、単に木簡の差し出しであるだけで木簡群と直接関係ないのかは一概には決めがたいけれども、後者であるとしても、点数的なまとまりからみるなら、密接な関わりをもって活動していることは確実である。

即位前の首皇子の居住地としては、平城宮東張り出し部南半の東宮に求めるのが一般的である。今回の調査地は二条条間路を挟んで法華寺旧境内南端に接する場所であり、藤原不比等とゆかりの深い地域である。また西の左京二条二坊十一・十二坪には後に離宮とみられる施設も設けられる（『年報 1997-Ⅲ』・『年報 1998-Ⅲ』を参照）。SD10580出土木簡は、調査地の平城宮東南に隣接するという地域的な性格を如実に反映するものといつてよい。今後、出土遺構の性格や調査地周辺の遺跡との関わりを慎重に考慮しながら、さらに究明していく必要があり、狭小な調査ではあったが極めて重要な資料群が提供されることになった。

（渡辺晃宏）

5 まとめ

本調査の成果をまとめると、以下の3点に集約することができる。

まず、平城京二条条間路南側溝を検出した。この側溝は、新旧2時期にまたがっており、流水にともなう砂が厚く堆積していたことから、砂の堆積が早く進行し、埋没が進んだことから、溝を再度掘り直して利用したと考えられる。なお、調査区内での側溝幅はSD10575で4 m、SD10576で2.5 mと旧段階のほうが幅広だが、かなりの流



図256 SD10575（左）とSD10577（右）（西から）

水量が推測できるため、流水にともなって側溝肩が浸食されたことにより溝幅が広がった可能性もある。

つぎに、二条条間路南側溝の南側で奈良時代前半の溝らしき遺構を検出し、最下層の木屑層に木製品や木簡が大量に出土した。出土木簡は、8世紀第2四半期に位置付けられるもので、共伴する遺物も木簡とほぼ同じ時期の所産とみられ、その資料的価値は高い。なお、こうした条坊側溝の内側にめぐる性格不明の溝は、近隣調査区でも検出している。今回、即位前の聖武天皇、すなわち首皇子に関わる官司の活動がうかがえる木簡がまとまった数量出土した。加えて、漆が付着した須恵器平瓶や挽物を製作した際に生じた残材が含まれていることから、付近に皇太子に関わる官司が存在していたと仮定すると、そこには木工に関わる工房も併設されていた可能性が浮上する。これらSD10580出土遺物は、奈良時代前半における二条二坊十四坪に当時皇太子であった首皇子に関連する施設が存在したことを示唆するものであり、当該坪の土地利用を考える上で重要な手がかりを提供することとなった。

また、奈良時代後半になると、二条条間路南側溝の南側は、築地塀によって荘厳されていた可能性が高いこともあきらかになった。これは、北側に法華寺阿弥陀浄土院が建立され、それにともなって周辺も整備された可能性を示唆する。法華寺阿弥陀浄土院は、光明皇太后の一周忌齋会に向けて天平宝字4年（760）からその翌年にかけて造営されたと考えられ、これに近接した時期に、門SB7110がある二条条間路北側のみならず、南側まで一体的に整備された可能性を示唆する。寺院など重要施設の整備は、当該部分にとどまらず周辺までも対象とした、広く景観を考慮したものだった可能性があるといえよう。

（青木）